４０代でも、全力中年!

福岡支部　福岡県土整備事務所　櫻井　利和

司馬遼太郎氏の有名な作品に、「坂の上の雲」という明治初期から日露戦争までを描いた作品があります。作品の解説によると昭和４３年４月から昭和４７年８月まで、足かけ５年にわたって新聞に連載されており、その前の準備の調査と読書と思索とに作者は５年余りの歳月をあてられたとのことで、作者は１０年にわたっての苦労で、この作品を完成させたということです。作者は、大正１２（１９２３）年生まれということから、本作品は、作者の４０代の全期間を使ってできた作品ともいえます。

数年前、サッポロビールのＣＭに、脚本家の宮藤官九郎氏がでておられました。彼は、４０代を「熟しながら朽ちていく」と評されていました。本人の言葉か、何かからの引用かは分かりませんが、言い得て妙だなと思いました。後で調べてみると、彼は１９７０年生まれで、自分たちと同世代であることが分かりました。

４０代のわが身を振り返ると、胆のうを一昨年摘出し、奥歯も１本既に無い、朝起きると背中と手足がこわばっていて、特に背筋が恒常的に痛い、十分に朽ちてきている実感があります。

では、熟していっているのか。

２０代のときは、全力だった気がします。理解できたもの、理解できないものを織り交ぜながら、次に進んで行くのが精一杯だった感じです。一人前になったと思う時もあれば、次には全然未熟、半人前と思ううちに過ぎていった感じでした。３０代では、いろんなものが繋がっていったというのが実感です。２０代のときに疑問として残っていたものが、３０代での経験と繋がって理解していくという感じがありました。

特に、国の水産庁の方から聞いた喜望峰の話が印象的で、地球の大きさを実感し、しかしながら地球以外にルールがなく、世の中の仕組みには大外枠があるのではないかという感覚を持ちました。それまでの自分は、世の中の仕組みは無限に広がっていて、一生かけても把握できないという感覚でしたが、それから脱出できたのは大きかったです。

話のついでに、世の中の仕組みについては、４０歳のときにもう一つの話があって、たまたま見た当時の新採向けの講話の資料に、イギリスの話が載っていて、細かい内容は忘れましたが、イギリスの憲法か、何かの話で、過去の事例を参考にして今のルールを作っているといったものだったと、勝手に想像しています。

新しい世の中の仕組みを作るには、過去に遡ること、隣人に聞くこと、この２つが大事なのかなと思っています。煎じ詰めると、この２つしかないのかもしれないとも、勝手に思っています。

新採のときの設計書作りも似たような感じだったように思います。まず倉庫にもぐって過去の似た事例を探して、それを参考に工種の足し算引き算をし、今回の工事に合わせた設計書を作り、歩掛の分からないところは、詳しそうで、優しそうな先輩に聞くといった

ところでした。

最初に書いた「坂の上の雲」の中でも、海軍の秋山真之参謀が、日本海海戦前に渡米して実戦を観戦したり、過去の海戦や陸戦を研究したりしていたといったことも作品の中に出てきます。そもそも明治維新後の国の制度は、岩倉使節団等により、欧米から輸入されたものであり、もっと遡れば、中大兄皇子の大化の改新や聖徳太子の十七条憲法も中国から輸入されたものといえます。

それはともかく４０代になった自分も熟さねばという思いはありますが、空回り中といった感じです。

自分は、土木の中で課題が多い分野として、河川の維持管理があり、この分野について一定の方針や施策が必要と考えています。４０代を使って、河川の維持管理の実践と予算と理論をどう組み合わせていくべきか。それを課題としています。道路の維持管理にはアセットマネジメントがある中で、河川の維持管理は、何をイメージして整理していくべきか。国では、河川の維持管理のシートは、カルテという医学用語が使われており、河川を人体としてイメージしているようです。気象現象の確率論と生命保険の確率論が近いのかなとも考えています。除草、伐木、浚渫、護岸補修、災害復旧、河川を人体と見立てたときに、どういう手当てがベストなのか、まだ答えは出ていません。

４０代が過ぎるまで、あと４年、「坂の上の雲」のような名作は無理ですが、全力で走り続けたら、何か新しい仕組みが見つかるかなという期待もあります。その間に、いろんなところが壊れていく心配もありますが、それをかえりみず全力中年やってみたら、おもしろいかなとも思っています。